

実りある“善意”



私たちは日常生活において、誰かのためを思って行動することがよくあります。その結果、お互いの関係がよくなることもありますが、時にはちよつとした行き違いやタイミングの悪さから、相手を不快な気持ちにさせてしまい、ギスギスとした空気が残る場合もあります。

今月は、他人に善意を向ける際の心づかいについて考えます。

ぶらぶらをしたの下……

ある日の夕方、鈴木和也さん（17歳）が高校から帰宅する途中のことでした。その日はテストの点数がよかったこともあり、朗らかな気分でした。駅の改札を抜けて自転車置き場に向かい、自分の自転車にまたがった、そのときです。

「ガシヤガシヤ！」

音がしたほうに目を向けると、出口付近で五、六台の自転車が将棋倒しになっています。そばを通った中年の男性が、自分の自転車のハンドルを引つかけようです。ところが、男性は倒れた自転車を起こそうともせず、逃げるように道路へと走り出していきました。

和也さんは「ひどい人がいるもんだなあ」と思いながら、一台ずつ起こしていききました。そして、最後の一台に手をかけたとき、背後はいごから女性のするどい声が聞こえました。

「何をしていますか!」

振り返ると、買い物袋ものぶくろを提さげた年輩ねんばいの女性が、和也さんをにらみつけています。

「え? いや、何をって自転車……」

和也さんが言いよどむと、その女性から矢継やつぎ早はやに言葉が飛んできます。

「それ、私の自転車ですよ。勝手に触さわらないでください」

和也さんは面食めんくらい、頭の中が真っ白になりました。

「この人は、何か勘違かんちがいをしているん

じゃないか」

そう気づいて弁解べんかいしようとするのですが、女性は「係の人を呼びますよ」と、和也さんを犯罪者はんざいしやと決めつけるようなことを言います。

和也さんは、他の人が自転車を将棋倒しょうぎたおしにしたこと、そのまましておくのは忍しのびなかつたので起こしていたことなどを、ようやく説明することができました。すると、女性は一瞬いつしゆん、バツの悪そうな表情ひょうじょうを浮かべましたが、「だったら、早くちゃんと説明しなさいよ」と言つて、荷台かだいのかごに買い物袋を放り込むと去つていきました。

ぼつねんとその場に残された和也さんは「参まつたなあ、なんなんだろう、あの人は」と、つぶやきました。

「悪い人じゃないかもしれないよ」

その日、夕食のテーブルについた和也さんは、憤懣ふんまんやる方ないといったようすで、両親に自転車置き場での出来事を話しました。

「いいことをしたのに、こんなものつてないよ。あんなふうに言われたら、誰だって腹はらが立つよ」

母親の有紀ゆきこさんは、「そうね、それは災難さいなんだったわね。せっかくだいいいことをしたのに、残念なことになっちゃったわね。でも、こんなことはたまたまなんじやないかしら」と言いました。

すると、父親の義彦よしひこさんがこう続けま





す。
 「そうだな。和也は悪くないと思うよ。
 あえて言うなら、悪かったのはタイムリ

グだな。二、三分早く自転車置き場に
 いていたら、自転車が倒れるところを見
 なかっただろうし、二、三分遅ければ、
 その女性とも会わなかっただろうね。

文句の一つも言いたかっただろうけど、
 自分の正しさを押し通そうとして相手を
 責めたりしたら、かえって話がこじれた
 かもしれないよ。善意で行動しても、そ
 れが他の人にうまく伝わらないことは、
 よくあることなんだ。

それと、その女性も悪い人じゃないか
 もしれないよ」

思いがけないお父さんの言葉に、和也
 さんは「えっ？」と聞き返しました。

「和也にしてみれば、善意の行動がよい
 結果を生まなかった」ということになる
 けれど、その女性にとつてはどうだろ

う。前にも自転車にいたずらをされたことや、盗ぬすまれたことがあるかもしれない。

もし、それが最近のことだったら、その女性が神経しんけいをとがらせていたとしても仕方がないんじゃないか？」

「うーん、そうかもしれない……。そこまで考えなかったよ」

「でも、和也はいいことをしたんだよ。今回は災難さいなんだったが、どんなときも冷静になって、相手の気持ちを察さつしてみるところ、心がけは大切だと思うな。きつと、その女性も勘違いかんちがいに気づいてバツの悪い思いをしただろうから、気の毒どくだったね」

そんなお父さんの話を聞きながら、和也さんは気持ち少し落ち着いていくのを感じました。



善意の すれ違い

よかれと思って起こした行動でも、ちよつとした行き違いで相手から思わぬ非難ひなんを受けることがあります。この場合、和也さんは純粹じゆんすいな善意から、倒れている自転車を起こしたのでしょうか。とはいえ、売り言葉に買い言葉で感情に任せ相手の勘違いを責めては、せつかくの善意も台なしですし、さらに悪い状況じようきょうになる可能性かのうせいもあります。

次に挙げる出来事も、お互いの善意がすれ違ってしまったときの話です。

ある年の暮れ、神奈川県に住む岡田吾郎ろうさん（29歳）の家に、妻・明美あけみさん（25歳）の愛媛県の実家から、みかんがたくさん送られてきました。さつそく箱を開け、一つを剥いて口にしてみると、甘くてたいへんおいしいみかんでした。

そこで、吾郎さんは正月休みの帰省のとき、東京で一人暮らしをしているお母さんに食べてもらおうとして、みかんの箱を車に積んで出かけました。

実家に着いた吾郎さんは、まずみかんを二つ仏壇ぶつだんに供えて手を合わせました。

その後、車から降りた大きな箱を茶の間に運び、「母さん、これ、明美の実家から送られてきたんだ。すごく甘いから



食べてみて！」と笑顔で渡すと、なぜかお母さんは困ったような表情を浮かべます。

「どうしたの？」と尋ねると、言いづらそうにこんな話を始めました。

「ご近所の塩原さんの実家がみかん農家だつて話、聞いたことあるでしょ。今年のは特においしいからつて、分けてくださったのよ。しかも、吾郎たちが帰つてくるならぜひ持たせてやりなさいつておっしゃつて、こんなにたくさん……」

そう言つてお母さんが奥の部屋から持つてきたのは、吾郎さんが運んできた箱よりも大きいみかん箱でした。吾郎さんと明美さんは目を丸くして、思わず顔を見合わせました。吾郎さんの家にもまだみかんはたくさんありました。

さんの気持ちを感じ、持ち帰ることにしました。

こうして帰りの車には、持って行ったみかんと交換に、さらに多い量のみかんが積まれたのです。

「それにしても参ったなあ」

帰宅後、吾郎さんがそうこぼすと、明美さんは申し訳ななさそうな顔をします。

「いや、明美のせいじゃないよ。おいしいから母さんにもと思っただけで、家にみかんがあるかどうかを聞いておかなかったのは、僕の失敗だったよ」

吾郎さんは、塩原さんとお母さんの気持ちを思いながら、持ち帰ったみかんを一つ食べてみました。それは、明美さんの実家から送られてきたみかんと同じくらい、甘い味でした。



吾郎さんがお母さんに電話をして「みかん、おいしかったよ。それで塩原さんにお礼状を出そうと思うんだけど……」

のほか喜んでくれました。

礼状を送ってから数日後、今度はお母さんから電話が来ました。

「今日、塩原さんが来てくださったの。吾郎からのお礼状、すごく喜んでいたわよ。そうそう、明美さんのご実家からのみかんも、とてもおいしかったわ。ありがとう」

電話から響く朗らかなお母さんの声を聞いて、吾郎さんはほっとしました。

誠実に 人と接する

善意のすれ違いが起きたとき、それをマイナスと考えずに対処することは大切です。吾郎さんは、自分の好意が実を結ばなかったことを悔やむより、まず自分を反省して、その後の方法や手段を考え、母親や塩原さんの気持ちを大切にすることを心がけた結果、全員が満足することができました。

私たちも普段から、どのようにしたら

相手を喜ばすことができるか、相手や周りを察する気持ちを持って行動していきたいものです。

現代礼法研究所を主宰する岩下宣子さ



んは、友人から聞いたという「電車の中の出来事」を、次のように紹介しています。

——二十代の女性が座っている前に七十代ぐらいの男性が立っていたそうです。

女性が席を譲ろうとすると、その男性は「冗談じゃない。私はまだ席を譲られるような歳ではない」と怒り出しました。

普通は人が親切でやってあげたのに、そんな言い方は失礼だと思われるでしょう。でも、その女性はこう言いました。

「ご気分を悪くしたら、どうぞお許しください。失礼ですが、私よりもお目上の方と思つたもので、席をお譲りしなければいけないと思つたまででございます。よろしければおかけ願ひませんでしようか」

そうして男性に座つていただいたそうです——（『れいろう』平成二十年五月号、モロロジー研究所より）

電車の中で席を譲るという行為は、日常的に行われています。そこに「ほんとうに相手のことを思いやる心」を込めてこそ、その善意は伝わっていくのではないのでしょうか。その女性は、自分の好意を相手に押し付けようとするのではなく、相手の立場や気持ちを観察して「どうしたら相手の心が和むのか、安心してもらえるのか」という思いやりの心を持つていたからこそ、「お目上の方と思つたもので……」という言葉が出てきたのでしょうか。

岩下さんは、これからの時代で大切なのは「誠実に生きていくこと」、つまり「真



心を込めて、真心を持って人と付き合い合うことだと述べています。

日々誠実に生きることが心を心がけ、深い思いやりの心を持って周囲の人と接していくことで、私たちの善意は実を結ぶのでしよう。そして、自分も相手もより多くの喜びを得ることができ、温かな人間関係が築かれていくのではないでしようか。

自分に原因があつて謝罪するのならともかく、相手の勘違いや誤解によつて非難された場合の対応は、ことのほか難しいものです。しかし、その際にも「まだ自分に足りないものがあるかもしれない」と、自分を振り返ることができれば、自分をより大きく成長させる糧となることでしょう。

笑顔の再会

さて、冒頭ぼうとうで紹介した鈴木和也さんのその後です。あの出来事から一週間ほど経たった日のこと、和也さんは同じ自転車置き場でまたあの女性と鉢合はちあわせました。

女性はこちらに気づいていないようでした。和也さんは声をかけずにおこうかと思いましたが、このままにしておいたら、お互いに気持ちが悪く落ち着かないかもしれないと考え、思い切つて声をかけてみることにしました。

「こ、この間は失礼しました！」

女性は初め、怪訝けげんそうな顔をしていましたが、やがてあのとときのやりとりを思

い出したのか、「あつ」と小さな声を上げました。和也さんは、女性が何かを言いかける前に「自転車、壊こわれてなかったか気になつて……」と、言葉を続けました。

すると、女性はほつとしたような表情で「こつちこそ、この前はほんとうにごめんなさいね。実は少し前に自転車を盗ぬすまれたことがあつて、てつきり……。変な勘違いをしてしまつて」と、恐縮きようしゆくしています。

「そうだったんですか。僕もちゃんと説明できなくて、すみませんでした」

そんな会話を交わし、笑顔でその女性



と別れた和也さん。お父さんの「相手の気持ち察してみる」という言葉を思い

出しながら、いつも以上にさわやかな気持ちで自転車のペダルをこぐのでした。